

駐留部隊と在留日本人商人との「共生」

——満州国熱河省凌源県の事例——

倉橋 正直

[1] はじめに

中国吉林省档案馆に満州中央銀行資料が所蔵されている。その中に様々な資料があるが、その一つに「出張員報告」がある。これは、満州中央銀行の各支店から、毎月一回、本店に向かって提出された報告書である。日本語で書かれている。当該地域の経済・金融状況が主な内容である。「出張員報告」を書くのは決まっていたようで（おそらく支店長）、一人の人がずっと書いている。一定期間にわたって、同じ支店からの「出張員報告」が残っていれば、結果的にその地域の状況を比較的長期にわたって観察する、一種の「定点観測」のようなものになる。

熱河省凌源県の支店からの「出張員報告」が、まさにそれに当る。1934年（康德元年）11月から1936年（康德3年）6月までの1年8ヶ月分が残っていた。前半は川幡繁造、後半（1935年11月より）は鈴木が執筆している。

また、これとは別に満州中央銀行凌源支行『地方情形調査報告書 凌源県城』がある。全部で11頁の短いもので、中国語で書かれている。著者は不明。1935年12月31日の発行である。表題に凌源県城とあるように、農村部を含めた凌源県全体ではなく、都市部である県城のみを扱っている。

本稿はこの2種類の資料を主に利用する。前述の「出張員報告」では、阿片のことが多く出てくる。凌源県を含め、熱河省の産業といえば、阿片ぐらいしかなかったからである。しかし、本稿では阿片問題は割愛する。

満州事変以前、熱河省には在留日本人はほとんどいなかった。熱河作戦で、熱河省に進攻した日本軍のあとを追いかけるようにして、各種の日本人（少数の朝鮮人を含む）が集まってくる。凌源県にも日本人が多くやってきた。前掲の「出張員報告」などは、軍事占領から、まだ2、3年しか経っていない1935年前後の凌源県の様子を報告している。この時期に凌源県にやってきた日本人の様子がある程度わかる。

実は熱河作戦の最中や直後のことは、比較的多く記録が残っている。この軍事行動が日本国民の関心を集めていたからである。熱河作戦の直後に、軍隊を追いかけて熱河省にゆく日本人（その多くは軍隊相手の売春婦とその関係者）のことを記した資料は比較的多く残っている¹⁾。しかし、戦闘が一段落し、占領支配する時期になると、はなばなしさがなくなることもあって、マスコミの関心は急速に薄れてしまう。熱河省に進攻した日本軍が、その後、同地をどのように占領・支配したかを記す資料はごく少ない。

1935年前後の状況を知らせてくれる前述の「出張員報告」などは、その意味で貴重である。本稿は、戦闘が一段落し、占領支配するようになった時期の在留日本人の状況を紹介する。なお、「出張員報告」などの原文はカタカナ表記である。本稿では、読みやすさを考慮して、ひらがなに直して表記する。

【2】 凌源県の治安状況と鉄道建設工事の進捗

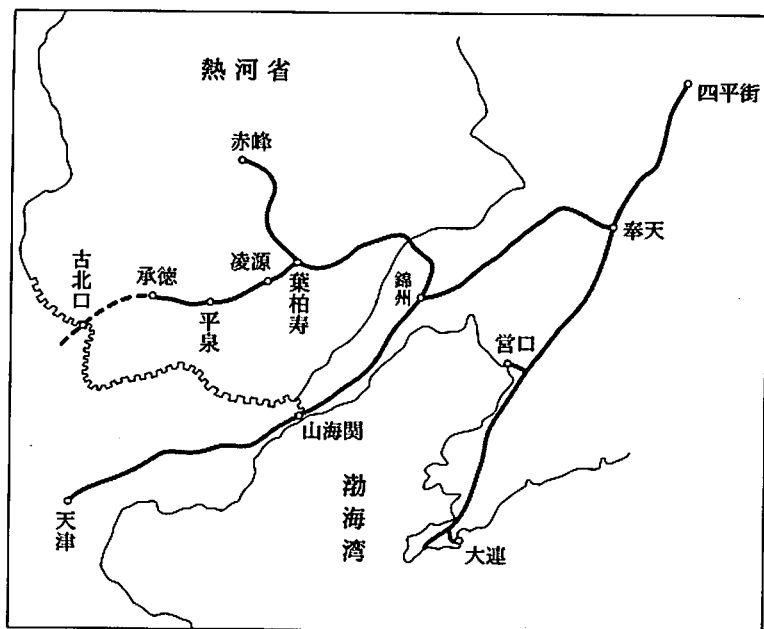
日本は1932年に満州国を作る。その翌年3月、いわゆる熱河作戦という軍事行動を起こす。当時、熱河省という省があったが、ここを占領し、満州国の版図に組みこんだ。これによって、万里の長城が満州国の西南の国境線となった。凌源県は熱河省の南部に位置していた（地図1）。

凌源県の周囲は一木一草も見ないような荒涼とした山地であった。土地もやせていたから、ケシぐらいしか植えられなかった²⁾。しかし、錦州と承徳のほぼ中間に位置していたことから、凌源県城は物資が集散する田舎町であって、それなりの賑わいを見せていた³⁾。

次は人口である。「凌源地方事情」（凌源出張員川幡繁造著、1934年11月26日）は「出張員報告」の一部であって、毎月の報告とは別に凌源県の状況を概括的に述べたものである。それによれば、「現凌源県戸数、人口に付き、県警務局最近の調査を示せば、左の如し。戸数 65,794。人口 325,714。（内、県城内人口 12,462）」であった。このように、凌源県全体では33万人弱の人口があった。

凌源県城だけについては、別の調査もある。

前掲、山崎惣與編『満州国地名大辞典』は、凌源県城の人口を、1934年（康德元年）12月調べで、「3,069戸、14,388人。（内日本人963人）」と述べている。また、満州事情案内所編『満州国地方誌』（満州事情案内所



地図1 熱河省の南部

報告第85号、1940年11月、630頁)は、「凌源街」の戸数3,104戸、人口14,060人。そのうち日本人180人、朝鮮人36人、外国人7人としている。

さらに、前掲、満州中央銀行凌源支行『地方情形調査報告書 凌源県城』(1935年12月31日調べ)は、戸数3,226戸、人口15,019人。そのうち、日本人454人、朝鮮人50人、外国人7人としている。このように、凌源県城の人口は、1.2～1.5万人程度であった。

当時、日本側は抗日武装勢力を匪賊と呼んでいた。当初、もともと警備が手薄な辺境では、多少、生き残ったとしても、全体としては抗日武装勢力を抑えこめると楽観的な見通しを述べていた(「出張員報告」、1934年10月)。しかし、抗日武装勢力はしぶとく生き残り、時に容易ならざる勢いを示した。特に夏季、彼らの活動は盛んになった(「出張員報告」、1935年5月)、(「出張員報告」、1935年6月)。

凌源県周辺にいる抗日武装勢力の規模は、もともと大きなものではなく、

比較的小さかった。「一部には北支方面と連絡を保ち居る政治匪もあり、」(「出張員報告」、1935年5月)というように、共産党の影響を受けたゲリラも多少いたが、しかし、この段階ではその割合はまだ小さかった。

彼らを「半農半匪なるを以て、討伐は困難なり。」(「出張員報告」、1935年6月)と表現している。一定の季節に限って、ゲリラに加わり、あとの時期は農業に従事している、いわばパートタイムのゲリラであった。山岳地帯で交通が不便なことも相俟って、彼らを根絶するのは難しいという見通しを述べている。

日本側は何回か、彼らに対して、徹底的な討伐を行う。これにより、彼らは潰滅的な打撃を受け、中には投降するものもいた。しかし、それでも完全に彼らの息の根を止めることはできなかった。ゲリラの一部はからくも生き延び、以後もしぶとく活動を続けた。しかし、「比較的治安の確立せるは皇城附近第一区のみで、県境地方、最も悪し。」(「出張員報告」、1935年5月)とあるように、ゲリラの活動は辺境にほぼ限られ、さすがに凌源皇城までは及ばなかった。したがって、皇城で生活している限りは安全であった。

錦州から北上して承德に到る鉄道は、日本が建設した。葉柏寿から分かれて赤峰に行く支線も同じく日本が建設した。当時は錦州から承德までであって、万里の長城を越えて北京までは通じていなかった。そこで、鉄道の両端の町の名前をとって、この線を錦承線と呼んだ。

鉄道の敷設は大工事である。短期間に準備できるものではない。おそらく、満州事変以前に中国側が計画(あるいは一部、着工)していたプロジェクトを引き継いで、完成させたものであろう。日本側にとっても、錦承線を建設する意義はあった。軍隊の迅速な移動や奥地からの物資の輸送などに、鉄道は不可欠だったからである。

次に工事の進捗状況を見てゆく。まず、1934年10月段階で、凌源まですでに鉄道が通じていたようである。1935年1月15日より、凌源・平泉間の仮営業が始まる。しかし、この段階では、まだ平泉まで直通運行ではなく、凌源で打切り、別の列車に乗り換えねばならなかった(「出張員報告」、1934年12月)。

しかし、同年4月1日より、平泉まで直通運転となった。さらに平泉から承德に延伸する工事も行われていた。また、ほぼ同じ頃、赤峰支線の建

設工事も行っていた（「出張員報告」、1935年3月）。

1935年8月には、凌源平泉間の鉄道敷設で土地を買収された人に土地代金、約六万円が支払われている（「出張員報告」、1935年8月）。1935年10月1日より、凌源・平泉間の鉄道は本営業を開始した（「出張員報告」、1935年9月）。

このように、当時、凌源県附近で日本側による鉄道建設工事が行われていた。鉄道建設工事はもともと大規模なものであった。そこで、それに附随して多くの労働者や技術者が凌源県に集ってくる。さらに鉄道建設工事の完成に伴い、彼らは大挙して、次の工事が行われる平泉方面に移動していった。後述するように、鉄道建設工事がたまたま近くで行われ、かつ終了したことで、凌源県城に在留する日本人社会に一定の変化をもたらさざるを得なかった。

〔3〕 在留日本人の人口の推移

凌源県城に在留する日本人の人口の推移である。彼らは三つのグループに分かれた。すなわち、駐留部隊の兵隊、鉄道建設工事に来ていた労働者や技術者、および、一般の民間人である。最後の民間人の大部分はいわゆる商人であった。

ところが、第一の兵隊と、第二の鉄道建設工事関係者の人数は、統計からはつきりわからない。抗日武装勢力がまだ活動している状況であるから、1935年前後の凌源はまだ準戦時体制にあった。そうである以上、兵力を敵に知られることは敵に慎まねばならなかった。だから、満州中央銀行の「出張員報告」という、いわば身内の文書であっても、兵力を示す資料、すなわち駐留部隊の兵員数は厳重に秘匿された。

また、錦承線の建設も軍事的な性格を帯びていた。戦争や占領支配と決して無縁な存在ではなかった。この段階で錦承線を建設することは、日本が熱河省南部を軍事支配してゆくのに有利に働いた。鉄道建設が軍事的な性格を持つことから、駐留部隊と同様に、鉄道建設に従事する労働者や技術者の人数も秘匿された。

次の文章が凌源県城に在留する日本人の状況を的確に報告している。すなわち、

「熱河討伐と共に入凌したる日本人は其の後、軍隊の駐在、鉄道の建設に伴ひ、遂次増加し、最高(昨年八月)1,500人の在留日本人を数へたることあり。弊員来凌当時、尚1,300人在留したるが、然るに其の後、鉄道建設の一段落と共に諸工事請負人及満鉄鉄道建設関係者等が統々引揚げ、これに伴ひ附随する所謂水商売も次第に移転せり。

本年一月、平泉への鉄道開通、仮営業を開始するや、この衰退に一層拍車を掛け、爾来、日本人は遂月、減少の一途を辿り、八月末現在に於ては左表の通り600人に充たざる状態となりたり。而うして現在残留せる商人にしても売行減少、商売不振に脅え居り、何れも引揚の好時期を狙ひつつあり。

中にも最も悲惨を極めたるは日本人旅館業者にして、凌源が終点たる当時に於ては宿泊者も可成りあり、相当の繁昌を呈したるも、平泉への鉄道開通と共に、宿泊者ばかり杜絶へ、最近に於ては六軒の業者中、平均一人といふ惨めな状態である。彼等業者は何れも不動産に相当の投資をなし居るを以て、衰微せる折柄、引受手も無之。財産の整理方法つかず、容易に引揚げ得ざる状態である。

以上は大体の在凌日本人の状態にして、産業的、政治的に何等の背景を持たない凌源にとっては、景気も一時的のものにして、結局、衰退の途を辿る外なきが、朝に一軒、夕に一軒、引揚の声を耳にし、凋落し行く日本人の有様を眺めては、共食式商業をなす以上、当然とは云へ、余り感じのよきものに非ず。その定着性なきを遺憾に思ふ。」(「出張員報告」、1935年8月)

このように、凌源県城にやってきた日本人は1934年8月ごろが最も多く、1,500人もいた。前述したように、凌源県城の人口はおよそ1.5万人であった。だから、最盛期においては、在留日本人は凌源県城の人口の一割を占めるほどであった。

川幡繁造という名の行員が凌源に赴任した時(具体的な期日は不明)でも、まだ1,300人いたという。その後、鉄道工事が一段落したことで、労働者や技術者が引き揚げていった。1935年1月、平泉まで鉄道が延び、凌源は一通過駅にすぎなくなってしまう。その結果、さらに在留日本人は減少し、1935年8月末で600人に減る。

商売は振るわず、引き揚げようとするものが多くなる。凌源が鉄道の終

点の時は、日本人旅館業者の旅館は、宿泊者でにぎわった。ところが、平泉まで鉄道が延伸したことで、宿泊者はぱったりいなくなってしまう。最近では6軒ある旅館の宿泊客は平均一人しかいない。引き揚げたいのであるが、彼ら旅館業者は不動産に相当の投資をしたので、簡単に引き揚げもできず、困っているというのである。日本人商人がどんどん引き揚げてゆく有様を見るのは、あまり感じのよいものではないと述べている。

凌源在留日本人商人の商売が振るわなくなった原因を、鉄道が平泉まで延び、凌源が通過駅になってしまったことに求めている。凌源に代わって、平泉が繁昌する。繁昌している平泉が、現段階では日本人商人を多く吸引しているというのである。昨年まで1,000人いたのが、300~400名に減ってしまう。ある商人は、昨年の売上は12万円だったのが、今年11月段階で、まだ2万円にすぎないという（「出張員報告」、1935年11月）。凌源在留日本人商人の商売の落ち込みは大きかった。また、具体的なことは記されていないが、駐留部隊の兵員数も減少した。

これらの史料を読んで、まず疑問とするのは、「出張員報告」の中で示される在留日本人の人数の中に、駐留部隊の兵員や鉄道工事関係者を含んでいるか否かである。はっきり明言されているわけではないが、文章を読む限り、出張員があげる在留日本人の数は、兵隊や鉄道工事関係者を含んでいないように思われる。

凌源県全体の人口は約33万人であった。これだけの数の中国人を恒常的に支配してゆく以上、相当数の兵力が必要とされる。1935年11月段階で、日本人商人などの民間人を全部、含んで300~400名になってしまう。もし、この中に駐留部隊まで含んでいるとすると、駐留部隊の兵員数はごく少数、たとえば100名ぐらいになってしまう。100名ばかりの駐留部隊では、33万人の中国人を到底、押えきれない。だから、「出張員報告」の中で示される在留日本人の中には、駐留部隊の兵隊や鉄道工事関係者は含まれていないと私は判断する。

「出張員報告」などによって、凌源県城に在留した日本人の人口の推移を具体的に見てゆく。（ ）内の数字は朝鮮人。

1934年8月、1,500人〔「出張員報告」1935年8月〕

1934年11月26日、1,400人以上（124人）〔前掲、「凌源地方事情」〕

1934年12月、963人〔前掲、山崎惣與編『満州国地名大辞典』〕

1935年2月、945人(133人)〔「出張員報告」1935年2月〕
1935年7月、633人(87人)〔「出張員報告」1935年7月〕
1935年8月、591人(74人)〔「出張員報告」1935年8月〕
1935年11月、300~400人〔「出張員報告」1935年11月〕
1935年12月末、504人(50人)〔前掲、『地方情形調査報告書 凌源県城』〕
1936年2月末、403人〔「出張員報告」1936年2月〕
1940年11月、216人(36人)〔前掲、満州事情案内所編『満州国地方誌』〕

このように、最高1,500人もいた在留日本人は、減少の一途をたどり、1940年11月には、わずか216人まで減ってしまう。

凌源県城に在留する日本人は、最も多い時、1,500人もいた。しかし、その後、急速に減少する。その理由をもう一度まとめる。(1)凌源県附近で行われていた錦承線の工事が終わる。この結果、それまで凌源県城にいた工事関係者は大挙して、次に建設工事の中心地となった平泉方面に移動した。具体的なことは不明であるが、それはかなりの人数にのぼったと推定される。(2)当初、列車は凌源が終点であった。のちに平泉まで延伸するが、しかし、まだ仮営業の段階では直通運転ではなかった。このため、平泉方面に向かう旅客は、いったん凌源で下車し、別の列車をしたてて、平泉方面に向かわねばならなかった。このため、彼らは往々にして凌源に一泊せざるを得なかった。ところが、本営業になると、平泉まで直通運転となった。この結果、凌源は単なる通過駅になってしまう。こうして、下車する旅客が激減し、凌源の没落に一層、拍車をかけた。(3)具体的なことは不明だが、凌源にいた駐留部隊の一部も別の場所に移駐した。これによって、駐留部隊の兵員数は確実に減少した。

前掲の史料に、「共食式商業をなす以上」という記述があった。凌源県城にやってきた日本人商人の商売は「とも食い」だというのである。彼らは周囲に多くいる中国人を商売の相手とせず、日本人だけを商売相手にしていた。その意味では、たしかに「とも食い」といえた。しかし、もう一步、仔細に見ると違っていた。すなわち、日本人商人はお互いを主要な商売相手にして商売をやっているわけではなかった。彼らの主要な商売相手は、駐留部隊の兵隊と、鉄道建設工事の関係者であった。この意味では、「とも食い」ではなかった。

だから、駐留部隊の兵隊と鉄道建設工事の関係者が大幅に減少すると、

駐留部隊と在留日本人商人との「共生」

日本人商人の商売はただちにやってゆけなくなった。やむなく、凌源の町を捨て、もっと有利に商売をやれそうな別の場所に、商人もまた移動していったのである。

次は凌源県城にあった日本側の役所や団体である。

「領事館警察署、憲兵分駐所、松井警備隊、居留民会、在郷軍人分会、国防婦人会、小学校」（前掲、『地方情形調査報告書 凌源県城』）

「在凌諸機関及日本人 凌源警備隊（北満出動中。残留部隊少数）、凌源憲兵分隊、凌源自動車隊（近日、引揚の予定）、凌源領事館警察署、凌源電信隊、凌源関東軍倉庫、凌源県公署、凌源専売分署、凌源電信電話局、凌源郵局、凌源税捐局、凌源税関」（前掲「凌源地方事情」）

二つの史料を比べる。まず、駐留部隊の中心は凌源警備隊であった。「松井警備隊」という固有名詞がついているので、その隊長を松井といたのであろう。部隊は現在、「北満出動中」であって、少数の留守部隊が残っているだけであった。

在郷軍人分会がある。警備が手薄になった時、在郷軍人が召集されて、警備に当たった⁴⁾。

また、凌源県城になんと、日本の小学校があった。日本人小学校の存在は前掲、満州事情案内所編『満州国地方誌』（552頁）からも確認できる。凌源県城に最盛期には在留日本人が1,500人もいた。彼らの中には家族を伴ってやってきたものもいた。だから、学齢期の小さい子どもも相当数、いた。子どもの教育のために、こんな辺鄙な町にも日本の小学校を作ったのである。小学校は「凌源県居留民会立凌源県城小学校」とでも称したのであろうか。公教育の体裁をとっているが、しかし、実態は寺子屋か私塾に近いものだったのであろう。準戦時体制下の、地の果てともいうべき熱河省の小さな町に日本の小学校が存在したことがおもしろい。

〔4〕 在留日本人商人の商売の内容

まず、「出張員報告」のほうでは、在留日本人の職業別の人口統計が二つ出てくる。「凌源地方事情」（1934年11月26日）（表1）と、「出張員報告」（1935年2月）（表2）である。二つを比べると、職業の中で、いくつかは同じ項目がある。すなわち、[官吏・官公吏]、[料理屋・料理業]、[飲食店・飲食店業]である。しかし、残りは違っている。

表1 「凌源地方事情」 1934年(康德元年)11月26日

在留日本人(領誓調査)

| 職業別 | 戸数 | 男 | 女 | 計 |
|-------|-----|-----|-----|-----|
| 官吏 | 11 | 33 | 13 | 46 |
| 会社員 | 21 | 138 | 33 | 171 |
| 料理屋 | 11 | 17 | 128 | 145 |
| 飲食店 | 18 | 19 | 89 | 108 |
| 土木請負業 | 10 | 38 | 9 | 47 |
| 運転手 | 19 | 91 | 14 | 105 |
| その他 | 106 | 190 | 124 | 314 |
| 計 | 196 | 526 | 410 | 936 |

「以上の外、朝鮮人124人あり。又、無届者跡からざるに見て、現在数は1,400人以上に上るものと観られる。」
 ⇒⇒⇒936+124=1,060人。ということは、340人程度が無届けになる。全体の24%だ。

表2 「出張員報告」1935年2月(民会事務所調査)

| | 戸数 | 男 | 女 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 内地人 | 271 | 421 | 391 | 812 |
| 朝鮮人 | 37 | 72 | 61 | 133 |
| 計 | 308 | 493 | 452 | 945 |

職業別人口表

| 職業別 | 戸数 | 男 | 女 | 計 |
|-------|-----|-----|-----|-----|
| 官公吏 | 45 | 50 | 36 | 86 |
| 軍属 | 21 | 34 | 21 | 55 |
| 旅館業 | 7 | 14 | 25 | 39 |
| 料理業 | 12 | 24 | 96 | 120 |
| 飲食店業 | 14 | 17 | 53 | 70 |
| 食料雜貨業 | 10 | 26 | 16 | 42 |
| その他 | 199 | 228 | 205 | 533 |
| 合計 | 308 | 493 | 452 | 945 |

「凌源地方事情」に掲載されている「会社員」171名、「運転手」105名は理解に苦しむ。凌源県城に日本側の会社があり、会社員が21戸、171名

もいたとはにわかに信じられない。また、「運転手」が19戸、105名もいたというのも納得がゆかない。二つの統計資料とも、「その他」の項目の細目が記されていない。こういったことから、具体的な統計数字が掲げられている割には、これらの統計から、凌源県城に在留していた日本人の様子は浮かんでこない。

これとは別に、前掲、『地方情形調査報告書 凌源県城』に、日本側の商店が掲載されている。この資料はおもしろい。いろいろな想像がわく。

「日系 運輸業一戸、自動車修理業一戸、食料品商三戸、旅館商六戸、料理四戸、咖啡馆三戸、雑貨商一戸、印刷所一戸、請負業二戸、靴鞋商一戸、魚化石販売商二戸、医院一戸、鮮魚商三戸、呉服店一戸、洋服店一戸、古物商二戸、湯屋一戸、計三四戸」（前掲、『地方情形調査報告書 凌源県城』、1935年12月末、9頁）

中国在留の日本人商人の統計を利用しようとする場合、注意せねばならないことがある。すなわち、彼らは往々にして表向きにしている商売はほとんど名前だけであって、実際には禁制品のモルヒネなどを中国人に密売して生計を立てていたからである。しかし、この場合はその可能性はなかった。なぜなら、熱河省は阿片の一大生産地であって、阿片がほとんど唯一の産業であった。したがって、阿片は身近にごろごろしていた。なにも、日本人からモルヒネを買う必要はなかった。ここでは、モルヒネ密売人が存在する余地はなかった。

旅館商六戸というのは、前掲、「出張員報告」（1935年8月）の報告内容と符合する。宿泊客が激減したので、本当は早く凌源から逃げ出したいが、しかし、不動産に多額の投資をしてしまったために、出てゆくに出てゆけないと、進退窮まり立ち往生している6軒の旅館業者である。

魚化石販売商二戸とは恐れ入る。このあたりは珍しい化石がいっぱい採れるところである。魚の化石といているが、それ以外、たとえば、有名なものでは羽毛のある小型恐竜の化石なども、このあたりの地層から出土している。すでに1935年の段階で、こういった化石を商売のタネにする人がいたことがわかって、興味深い。当時でも、化石の販売が商売として成り立っていたのであろうか。

また、鮮魚商三戸もすごい。こんな山の中に、魚屋が3軒も営業していた。鮮魚商という以上、彼らが扱う魚は、日本人が好む海の魚である。渤海

海湾で獲れた魚を扱っていたはずである。それも、干物や塩を大量にふった塩魚ではおいしくない。やはり、鮮魚商と名のる以上は、生の新鮮な魚でなければならない。しかし、凌源県城は海(渤海湾)から相当離れている。海浜の町では決してなく、むしろ山中の町である。この時期、冷凍技術はまだ遅れていた。そういった状況で、どのようにして、凌源まで新鮮な魚介類を持ち込んできたのであろうか。よく魚屋が営業できたものだと、不思議でしかたがない。

咖啡館三戸もまたすごい。この時期、中国人にはコーヒーを飲む習慣はなかった。だから、客はほぼ日本人に限られる。いわゆる日本式の喫茶店である。こんなものが、戦塵たなびく熱河の田舎町に3軒もあったというのである。最大でも1,500名しかいなかった日本人社会を相手にして、3軒ものコーヒー店が果たしてやってゆけたのか。甚だこころもとない感じを受ける。

湯屋一戸もおもしろい。中国式の銭湯ではない。日本人を客とする日本式の銭湯である。印刷所一戸も、こんな僻遠の地ではおよそ商売にはなりそうもない感じである。

【5】 兵士たちの福利厚生

凌源県城に、この時期、なぜ、日本人が経営する鮮魚商や咖啡館があったのであろうか。次にこの問題を検討する。

日本軍は伝統的に一人一人の兵士を大事にしなかった。そのことはさまざまな領域でいえたが、兵士の福利厚生についても、それがあてはまった。まだ内地の兵営にいる時でも、兵士の福利厚生面はなおざりにされた。まして戦地に出動すれば、その状況は一層ひどくなった。他国の軍隊の場合、兵士の福利厚生はもっと重視された。その意味で、日本軍は特別であった。

しかし、一人一人の兵士も人間であり、召集される以前は市井にあって、いわゆる市民生活を送っていた。長期間、前線に送られるだけで、兵士は十分、ダメージを受けた。それに、さらに劣悪な福利厚生が彼らを一層痛めつけた。

こういった状況に対処するため、往々にして民間人の商人が戦場近くまで出かけた。彼らは、兵士を相手に商売することで、兵士の福利厚生を多少とも向上させるのに貢献した。戦地に商人が出かけ、兵士を相手に商売

することは、すでに日露戦争の時に明瞭に見られた⁹⁾。その伝統が、熱河作戦後の熱河省でも続いていたと私は理解する。

商人はいつも必ず戦場近くにやってくるわけではなかった。彼らが集まってくるには一定の条件が必要であった。すなわち、まだ戦闘が続いている間は論外であった。また、軍の駐屯期間があまりに短くてもいけなかった。軍がある程度、長期に駐留する場合、いつのまにか、駐留部隊の近くに一群の日本人商人が店を開くようになる。彼らは、日本軍の駐屯地に隣接した場所に一箇所に固まって住んでいたと推察される。中国人と雑居していたとは考えられない。

軍隊と売春はもともと密接な関係がある。だから、まず、兵士を相手とする売春婦と業者が多く集まってくる。売春がたしかに兵士の福利厚生の中核であり、また、頂点に位置していた。

前掲、『地方情形調査報告書 凌源県城』（9頁）の日本人商店のリストの中に、「料理四戸」とある。往時、中国東北地方に出かけた日本人は、多くの町で売春施設を作った。そこでは飲食もできたが、他方では明らかに売春の場でもあった。そういった店には多く「御料理」という看板がかかっていた。それで、「御料理」は、中国側から売春施設を意味する用語だと誤解されてしまう。

この場合の「料理」も、売春施設と飲食を兼ねた店の可能性が高い。単なる料理店と見ることは妥当ではあるまい。売春婦が常に店にいる場合もあれば、外から通いでやってくる場合もあった。（表1）、および（表2）からわかるように、料理屋と飲食店は、戸数（世帯数）に比して、女性の数がずっと多い。——（表1）では、料理屋11戸、女性128名。飲食店18戸、女性89名。（表2）では、料理業12戸、女性96名。飲食店業14戸、女性53名である。兵隊を相手にする売春婦を、表向き料理屋や飲食店の従業員としてカウントしているからである。

たとえば兵隊が売春をして、代金を支払う。その金は業者と売春婦のものになる。売春婦は営業上、美しく装う必要がある。たとえば、凌源がもっと大きな町ならば、彼女たちの髪を専門に扱う「髪結いさん」もいたはずである。彼女たちは衣服（和装・洋装）を買って着飾る。凌源の町が僻遠の地であるから、遠くまで買いに行くことはできない。やむなく、凌源に店を出している商人の所から購入する。

彼女たちの需要を当て込んで、こんな辺鄙な、かつ、日本人が少ししか

いない所でも、呉服店、洋服店、靴鞋店（はきものや）といった商売が成り立った。要するに、こういった店の直接の顧客は日本人の売春婦であった。そして、彼女たちの購買力をバックから支えていたのは、凌源に駐屯している日本の軍隊であった。

また、前述の日本人商店のリストの中に「医院一戸」がある。売春婦たちは一週間に一回程度の割合で、性病検査を受けることが義務づけられていた。これを検徴（ケンバイ）といった。検査の結果、運悪く性病にかかっていることが判明した売春婦は、稼業を休ませ、施設に収容して治療した。その施設を婦人病院といった。したがって、婦人病院は検徴というシステムにとって必須の施設であった。そういう観点から眺めると、医院一戸という表現は気になる。実質的には婦人病院のことではないかという気がしてならない。

その場合、検徴＝性病検査が医者の主な仕事になる。主に検徴を仕事にしている医者も、正規の医者とは考えにくい。むしろ、限りなくニセ医者ではないかという印象を受ける。たとえば軍隊で衛生兵になり、促成の研修を受ける。その時の経験を土台にして、あとは見よう見まねで、医者の仕事をそれなりにこなしている衛生兵上がりのニセ医者の姿を、私はついつい思い浮かべてしまう。正規の資格を持った医者が、どうして、こんな僻遠の、しかもまだ戦塵が完全に収まったとはいえない、熱河省の奥地にやってこよう。

一方、兵士が求めるものはセックスばかりではなかった。セックスさえできれば、あとのことはどうでもよいというほど単純ではなかった。兵士が潜在的に求める福利厚生はもっと多様であった。日本人商人は、そういった兵士たちのさまざまな要望に応えてゆく。

たとえば、前述のリストに「鮮魚商三戸」とあった。日本軍隊が長期にわたって凌源県城に駐屯する。兵営の食事は単調でまずかった。彼らは時にうまいものを食べて元気をつけたいと望んだ。比較的多額の給料を得ている将校は、その気持ちがよけいに強かったであろう。彼らにはそれだけの金銭的な余裕もあった。きれいで、広々としたタタミの部屋で、ゆっくりとした気持ちでおいしい料理を食べたいと希望する。

彼らは料理店で時に伝統的な日本料理を食べる。その時の原料である鮮魚を提供するのが、こういった鮮魚商であった。だから、鮮魚商の主要な

顧客は、やはり日本軍隊の将兵であった。民間人の商人ではなかった。

コーヒー店や湯屋の主要な顧客も民間の商人ではなく、駐留している日本軍の将兵であった。日本人将兵は、外出の際、これらのコーヒー店に入り、日本内地で味わったものに似た苦いコーヒーを呑む。つかの間、兵営ではない、シャバの気分を味わうことができた。また、湯屋も日本式の銭湯であった。兵営にある風呂は狭くて汚かった。それに対して、民間が経営する銭湯＝湯屋の湯船は広く清潔で、気持ちよかった。兵士はこの風呂に入って、それこそ命の洗濯をすることができた。

印刷所一戸も、軍隊の仕事を回してもらっていると推察される。もちろん、機密の文書類を民間業者に印刷させるわけにはゆかない。そうではなく、公にしてもかまわない文書の場合、この印刷所に出して印刷させたのであろう。民間だけでは、それほど印刷の仕事があったとは思われないからである。

戦地に投じられた兵士は、他国の軍隊の兵士に比べ、一層、劣悪な環境に苦しまねばならなかった。日本軍隊の兵士に対する福利厚生面の弱さが、結果的に民間人の商人を多数、駐留部隊の近くに引き寄せることになった。

福利厚生面の改善を軍に求めても、むだであった。やむなく、兵士たちはその不足分を、戦地にやってきた日本人商人に求めた。兵士たちは、内地で市民生活を送っていた時に似た状況を、たとえ、つかの間であっても再現したいと切実に望んだ。たとえば、時にはうまい飯を食いたい。セックスもしたい。広くて清潔な湯船につかり、ゆっくり入浴したい。きれいで、広々としたタタミの部屋でゆっくり休息したいなどである。

こういった兵士の要求に、軍では応えられなかった。軍が応えられない部分を、民間の商人たちが提供した。——料理店は売春と飲食の双方を提供した。その料理店で出される御馳走の材料を、鮮魚屋が提供した。コーヒー店や湯屋＝日本式の銭湯は、それぞれ内地にいた時の雰囲気をかもし出してくれた。

商人たちは戦争をいわば商売のタネにする。戦地であるから、たしかに多少危険であった。しかし、軍の事実上の庇護もあって、相当に儲かった。戦地では荒稼ぎが可能であった。軍費の一部は、占領地にやってきた商人に落ちた。軍費で彼らは潤った。これがなければ、どうして危険で、味気ない僻遠の地にわざわざやってこよう。それだけの実入りがあったからこ

そ、やってきたのである。

こうした事情から、直接の戦闘が終わり、比較的長い駐屯生活に移った段階で、一群の商人たちが、どこからともなく集まってくる。軍は彼らを追い出したりしない。内心、彼らの到来を歓迎し、彼らに対して種々の便宜を供与した。特に売春婦をつれてきた業者に対しては、その対応は顕著であった。

他国の軍隊の場合、軍自身が兵士に提供する福利厚生面の数々の措置を、日本軍の場合、民間人の商人の手によって行わせた。この結果、長期に駐屯する軍隊にとって、彼らは必須の補完物となった。

こうして、軍と、戦地にやってきた民間の商人とは互いに利用しあう関係になる。しかし、両者の間に矛盾もあった。すなわち、軍は、商人を明確に自己の管轄下に置かなかつたからである。商人たちは戦地に勝手にやって来て、商売をしているというのが建前であった。だから、商人側の職種や人数を、軍は指定しなかつた。商人を選別することはせず、「来るものは拒まず」で、勝手に来させた。

すると、軍が潜在的に求める民間の商人の職種・人数と、実際にやってきた商人の職種・人数とが必ずしも合致しなかつた。戦況はいつも変動していて、固定していない。駐留部隊の兵員数も始終、変動していた。これは、やむを得ないことであつた。

軍隊の兵員数に比して、やってきた民間の商人が少ない場合、商人側は大きな利益をあげることができた。逆に兵員数に比して、民間の商人が多すぎた場合、個々の商人たちの利益は小さくなった。後者の場合、商人側は自らの判断で、その地から引き揚げ、もっと儲かりそうな別の場所に主体的に移動していった。

〔6〕 まとめ——いわゆる従軍慰安婦問題への見通し——

比較的長期に日本軍が占領地に駐屯している場合、そこに一群の日本人商人がやってくる。彼らは軍から正式に依頼されたのではない。勝手にやってくる。駐留部隊を相手に商売をするのが彼らの目的である。軍の駐屯地は戦地、あるいはそれに準じた地域であるから、民間人が勝手に入ってこれない。民間人の商人がそこに入ってこれたということは、軍から正規に許可されたか、あるいは黙認されたからである。

駐留部隊と在留日本人商人との「共生」

日本軍は伝統的に兵士一人一人の福利厚生を大事にしなかった。軍はこの方面をなおざりにした。結局、戦地にやってきた民間の商人が、軍に替わって、それを担当するようになる。彼らは、売春を頂点とするさまざまなサービスを兵士たちに提供する。長期の駐留で、心身を消耗させている兵士たちは喜んで、商人たちが提供するさまざまなサービスを楽しんだ。軍の側は、表向きは商人の活動に関与しなかったが、実際にはさまざまな便宜を供与した。

こうして、駐留部隊と在留日本人商人との間に、相互に利用しあう関係が成り立つ。こういった両者の「共生」関係は、すでに日露戦争の時から見受けられた。外国に遠征した場合、駐屯地に当該国の商人が集まってくる現象は、他国の軍隊にはなかった。日本の軍隊の持つ特殊性であった。それは伝統的に兵士一人一人を大事にせず、彼らの福利厚生をなおざりにした日本軍の軍事思想に原因が求められる。

本稿では、満州中央銀行の「出張員報告」を主な史料として、1935年前後の、満州国熱河省凌源県の皇城の場合を紹介した。こういった駐留部隊と在留日本人商人との「共生」関係は、その後の日中戦争においても当然、続いた。日中戦争は、規模が大きく、時間も長かったから、両者の「共生」関係も、もっと大規模なものであったと推察される。

いわゆる従軍慰安婦問題を考察する時、本稿で述べた駐留部隊と在留日本人商人との「共生」関係の存在が前提になると私は考える。残念ながら、これまで、こういった観点からの検討が欠如していた。

最後に、凌源とは違う場所であるが、関連する所があるので、二つの史料を紹介する。はじめは熱河省赤峰県に関するものである。

「居留邦人、十二月末現在、戸数九〇戸、人口三百七十名あり。主として料理屋、飲食店、宿屋（計二四）等を経営し、其の顧客は軍隊及居留民にして、相当の収益ある模様なるも、家屋修理、什器購入等のため、多額の費用を要し、純利、僅少にして、且、現有消費者数にては、漸く共喰の状態を現出せんとしつつあり。（中略）

四、邦人料理店方面 各料理店共に好景気を呈し、一流料理店に在りては、一日百五十円平均、内、芸酌娯楽高四割、酒肴揚高六割なり。支出として材料の購入、電灯料、部屋の修繕費、薪炭費等の諸経費、其

の他の資本金利等を見積りて、揚高の七割を要し、純利益は三割弱にして、一日平均二十円位なり。」(1934年1月11日、中島在赤峰領事館警察署長、赤峰警高発第54号、「赤峰経済事情報告」)

赤峰は、凌源よりも北方に位置している町で、鉄道の支線の終点である(地図1参照)。赤峰は隣接する田場と並んで、熱河省の中でも、特に阿片の産地として有名な所である。この史料は満州中央銀行の史料の中に入っていたが、これまで紹介してきた「出張員報告」ではない。赤峰にあった領事館警察署長(中島という名前)からの報告である。時期は1934年1月である。熱河作戦が1933年3月なので、占領してから、まだ一年もたっていない。

料理店が事実上、売春の施設であった。「其の顧客は軍隊及居留民にして」とあるように、売春の相手は駐留部隊の将兵と在留日本人(居留民)であった。売春婦は明治以降、通常、芸妓・娼妓・酌婦の三つに分類された。娼妓が公娼制度下で売春をする公娼である。酌婦は公娼制度に入らないで売春をする私娼であった。しかし、外地では国際的な評判を気にして、娼妓の名称を使わなかった。だから、この場合「芸酌婦」、すなわち、芸妓と酌婦と称しているが、その実態は内地の娼妓と変わらなかった⁶⁾。

客の支払った売春の代金の分ける比率が、この史料に出ている。すなわち、「内、芸酌婦稼高四割、酒肴揚高六割なり」とある。内地でも、娼妓(公娼)と業者(抱え主とか楼主などという。法律上の名称は貸座敷業者)との取り分の比率は、多くの場合、4対6であって、売春婦の取り分は4割であった。赤峰の場合もこれと同じ比率で分けている。

だから、この場合、女性はどこから見ても売春婦である。私が以前、提起した、従軍慰安婦の中の売春婦型に属している。史料が従軍慰安婦の中の売春婦型に属していることを明確に示している。1934年1月の時期だから、日中戦争の3年半前に当たる。こういった時期に、内地の娼妓と同じ取り分の売春婦が、赤峰の料理店で、駐留部隊の将兵を相手にして稼いでいたのである。

江西省九江の写真。

朝日新聞大阪本社所蔵の富士倉庫写真の一枚である。裏に「大阪朝日15.1.19 保存写真」というゴム印がある。あとは手書きで、「新年の大阪



江西省九江の写真

版用」、「大陸に氾濫した大阪色 九江大仲路の大阪色 九江 小山特派員撮影」と記されている。後述するように、昭和15年(1940年)1月19日の『大阪朝日新聞』(大阪版)に、この写真は掲載される。したがって、ゴム印は、この写真を撮影した日時ではなく、新聞に掲載された日時を示している。写真を掲載した記事から判断して、この写真は1940年1月に、江西省九江で、大阪朝日新聞の小山特派員が撮影したものである。

九江は、江西省の北端に位置する港町で、揚子江(長江)に面している。また、鄱陽湖(はようこ)の出口も扼していたから、水運の要衝であった。1940年は、日中戦争も4年目に入ったところである。決して緒戦の段階ではない。九江は軍事物資の重要な集散地として、多くの日本軍が駐屯していた。

日本語で「美味●● 大阪寿し 九江名代」と書かれた看板が店の前に掲げられている。その店の前の通りを二人の若い女性が歩いている。日本髪を結び、和服を着ているが、彼女たちは、場合によっては日本女性ではなく、朝鮮人女性だったかもしれない。しかし、写真だけからは判らない。とにかく、戦地であっても「お正月」が来たので、せい一杯、おしゃれをして、九江の繁華街(大仲路)を二人して歩いているところである。彼女たちの後ろから、日本軍の軍服姿で武装していない二人の男性も歩いている。

日中戦争の真っ最中に、九江のような前線の町に、日本の若い女性がいた。彼女たちは、まぎれもなく日本軍の兵士を相手にする売春婦であった。いわゆる従軍慰安婦なるものは、「強制されて」、もっと厳密に言えば、「首に縄をつけて」抵抗できない形で拉致してきたり、あるいはまた、甘言を弄して、だまして連れてきたものだと言われている。私は以前から、こういう見解に疑問を持ってきた。私は、従軍慰安婦には売春婦型と性的奴隷型の二つのタイプがあったと主張した。

強制的に戦地につれて来られた性的奴隷型の女性たちは、当然、地獄の日々を毎日、泣き暮らして過ごしていたことであろう。しかし、今回、紹介した写真の二人の女性はそういったタイプには見えない。写真はけっこう正直である。その場の「真相」を切り取って、見るものに示してくれる。彼女たちはいそいそと胸を張って街を闊歩している。九江の二人の女性は、明らかに売春婦型に属する。私は、極端な話、この写真一枚で、前述のステレオタイプな従軍慰安婦理解は崩れさると考える。

また、九江の町に大阪寿しの店が出ているのも珍しい。当然、日本兵を相手に商売している。兵士も人間である。兵営で食べる食事はまずい。戦地にいても、可能ならば、たまには、うまいものを食いたい。ひょっとすると、当時、九江の町に、大阪府出身の部隊が駐屯していたかもしれない。その場合、故郷恋しさと故郷の味に釣られて、彼らは喜んで大阪寿しの「のれん」をくぐったことであろう。

九江の町に大阪寿しの店を出しているのも在留日本人商人である。だから、熱河省凌源県城の場合と同様に、日中戦争期、江西省九江でも駐留部隊と在留日本人商人との「共生」関係があったのである。

注

- 1) たとえば、中山忠直「満蒙の旅(3)」、『東洋』419号、1933年11月
- 2) 「県内殆んど山岳丘陵を以て蔽はれ、平地としては僅かに大凌河流域及県城附近一円のみ。随って可耕地面積は全県の十五分之一、約五拾五万畝に過ぎず、而して山地は一木一草も見ざる一面の赤土にして、毎年雨期に際し、土砂を流出して、全山岩石を露出するの状態なり。更に可耕地と雖も、地味肥沃とは言ひ難く、相当の施肥をなさざれば、特殊農作物を除き、先づ見込薄と観らるるが如し。」(「凌源地方事情」、「出張員報告」の一部。1934年11月26日)
- 3) 「大街は街幅広く、商家櫛比し、木造にして古きも瓦葺の堂々たる建造物多く、咸豊年間には頗る隆盛を極めしが、清末には市況稍々衰頹し、現今再び起色を呈し、物資の集散相当多く、省内屈指の都市たり。」山崎惣與編『満州国地名大辞典』、日本書房、1941年、914頁
- 4) 「去る二十三日の如き本県城を去る十五支里の三十家子に、七八百名の匪団現われ、為に城内大混雑を呈し、日本軍隊、北支出動せる折柄とて、在郷軍人出動、徹宵警備に任せしことあり。」(「出張員報告」、1935年6月)
- 5) 拙稿「従軍慰安婦前史——日露戦争の場合」、『歴史評論』467号、1989年3月
- 6) 拙稿「満州の酌婦は内地の娼妓」、『愛知県立大学文学部論集(一般教育編)』38号、1990年2月

【補注】朝日新聞大阪本社の手雅春社会グループ・エディター代理と永井靖二記者のご尽力によって、中国吉林省档案馆所蔵の満州中央銀行資料および朝日新聞大阪本社所蔵の富士倉庫写真を利用することができた。このことを、

ここに記して、感謝の意を表するものである。

なお、永井靖二記者のご教示によれば、本稿で紹介した江西省九江の写真は、「大阪朝日新聞」(大阪版)、1940年1月19日の「大陸へ大阪の進軍③」という記事の中に掲載された。